

富士山を世界文化遺産に！



World

Heritage News Letter

富士山への登山者大幅増！

平成20年7月1日から8月31日までの富士山への登山者数（富士宮口、御殿場口、須走口、吉田口の合計）が公表されましたが、昨年に比べ各登山口ともその数が大幅に増加しています。

また、旅フェア2008会場で実施したアンケート（平成20年6月20日～22日、静岡県ブース来場者を対象に実施、有効回答者数…293名）では、「富士山の世界文化遺産登録」に対し、実に約93%もの方々から好意的な意見が寄せられました。

これらの結果は、「富士山」が世界文化遺産候補となり、国内外からの関心が高まっていること、また、世界文化遺産登録に大きな期待が寄せられていることの表れと考えられるのではないのでしょうか。

News List

- ◎『自然と文化の関わりの象徴 国立公園富士山』
（静岡県学術委員会 委員 高橋 進）
- ◎シリーズ「構成資産候補の紹介」
『山宮浅間神社』『富士山本宮浅間大社』
- ◎『富士山世界遺産塾』を初めて開講！
- ◎タイのTV局が「富士山」を取材！

自然と文化の関わり象徴 国立公園富士山

富士山は、箱根とともに昭和11(1936)年に国立公園に指定された。2年前に指定された日光など7公園とこの年の4公園は、わが国の先駆けの国立公園である(次の指定は、戦後まで待たなければならぬ)。

国立公園の根拠となる「国立公園法」(現在は、自然公園法)が制定されたのは、昭和6(1931)年である。一方、現在の都市公園のもとになった、社寺境内などを公園とする「太政官布告」は明治6(1873)年に公布されている。他の自然保護関連法制度も、近代日本の成立に歩調を合わせて整備されてきた。たとえば、鳥獣保護法のもとになる「狩猟規則」は明治25(1892)年に制定されているし、保安林制度の「森林法」は明治30(1897)年に制定されている。天然記念物も、大正8(1919)年には法律が制定された。



静岡県学術委員会 委員 高橋 進
(共栄大学国際経営学部教授)

前述のように、国立公園はこれらにだいぶ遅れて、昭和初期になって誕生した。きっかけは、ウオール街の株価大暴落(昭和4(1929)年)に象徴される世界大恐慌だ。その対策として、外国人観光客誘致により外貨を獲得するために、国立公園を利用しようとした。この時期、当時の鉄道省には国際観光局も設置されている。なにやら、現在の経済不況や克服のための「観光立国」と酷似している。こうした経過もあって、日本の国立公園では、生態系保全などよりも観光利用のための風景保護が、長い間の主流となってきた。そして、このことが日本の国立公園の特徴でもあり、各種の問題点の原因ともなっている。

しかし、国立公園は不況対策のために突如考え出されたわけではない。富士山を初めとして、箱根や日光を国が設定する公園(国立公園)にしようとする動きは、明治・大正時代を通じてあった。明治44(1911)年には、富士山を中心とする「国設大公園設置二関スル建議案」が帝国議会で採択されている。翌年には、日光についての同様の請願が採択された。富士山は、箱根や日光・尾瀬とともに、日本の国立公園の象徴である。そこでは、数々の先進的な国立公園管理の施策が展開されてきた。ゴミ対策、マイカー規制、自然教育、最近ではトイレ対策などなど。

これからも、富士山は日本の国立公園の象徴であり、先進的なモデルであり続けたい。

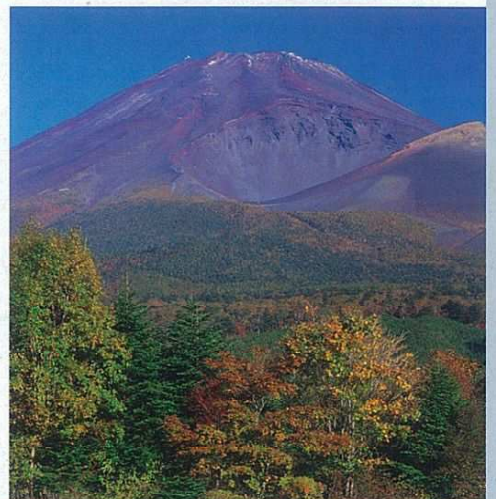
ところで、国立公園が生態系保護だけでなく、風景(景観)保護の場でもあることは、前述のとおりだ。この風景あるいは、景観の定義は学問的には難しいが、いずれにしても自然と人間の営み(人手が加わっていないということも含め)により創りだされたものである。

巨樹も、こうした自然と人間との関わり象徴だ。私は、環境庁勤務時代に全国の巨樹調査を行い、その縁もあって現在は「全国巨樹・巨木林の会」の理事も仰せつかっている。全国調査では、巨樹の自然特性のほか、人との関わりについても調査項目とした。その結果は、しめ縄や祠があつて信仰対象となつていたり、故事・伝承などがあつたり、地域のランドマークになつていたりする。その土地の名称が、巨樹に由来しているものさえある。巨樹が自然の中で単独で生育してきたのではなく、多くの巨樹は人との関わりの中で悠久の時を刻み、人々の畏敬の対象ともなつていくことが判明した。

平成19年11月に中国の四川省で東アジア地域世界自然遺産会議が開催された際に、世界自然文化複合遺産に登録されている峨眉山を訪れた。そこでは、仏教の聖地として山岳のあちこちに数多くの寺院が建立され、五台山(山西省)などとともに、中国三大霊山や四大仏教名山に

数えられている。同時に、標高三千メートル級の山地全体には、絶滅危惧種をはじめとする多くの野生動物植物が生育している。自然が豊かであるがゆえに人々に崇められ、聖地であるがゆえに貴重な自然が護られてきた。この点では、まさに自然と人間(文化)の関わり象徴でもある。

富士山は、秀麗な姿を有するわが国最高峰の山として、古来、人々から崇められ、様々な芸術や産業の源泉ともなってきた。また、その独特の地形などの環境によつて、特異な生態系が育まれてきた。国立公園の意義も、成立当初のような風景を求める観光利用だけではない。時代とともに変化してきている。富士山は、これからの時代の地域社会との協働による国立公園の象徴となつてほしい。また、わが国の自然と文化の関わり象徴としても、世界に誇れる手本であり続けることを期待したい。



今回は、富士山信仰の一つである浅間信仰を代表する富士宮市の「山宮浅間神社」と「富士山本宮浅間大社」を紹介します。

浅間神社とは

富士山は、何度も噴火を繰り返してきましたが、なかでも平安時代初め（8世紀末～9世紀）に最も激しい噴火がありました。そうした「荒ぶる山」富士山を畏れ敬い、山の鎮めを求めて火山の神であるアサマ（浅間大神）を祀る浅間神社が山麓に作られたと考えられています。

当時は天災を防ぐことが統治者の役割の一つだった時代でしたから、朝廷も浅間神社を保護し、神としての位階を高め、噴火を防ごうとしました。

その後、富士山の噴火が沈静化し、室町時代（14～16世紀）に富士登山の風潮が一般の人々にも広まると浅間神社は各登山道の基点となり、道者（信仰目的の登山者のこと）はここで水垢離等て身を清め、安全を祈願してから登山を行うようになりました。

また、富士山を直接遥拝できる中部



山宮浅間神社祭場（中央の高い部分が祭壇）

富士山本宮浅間大社の社伝では日本武尊が祀ったものだと言われていました。ここには普通の神社にあるはずの拝殿や本殿が無く、階段の先には祭場があるだけです。これは、富士山自体を神と考え、神社を遥拝所としていたため、山岳信仰の古い形態を伝えていきます。

富士山に登りました。その様子は室町時代の作と考えられる「絹本著色富士曼荼羅図」（重要文化財）にも描かれています。

山宮から遷された 富士山本宮浅間大社

この山宮から神を遷すことによって成立したとされるのが「富士山本宮浅間大社」（以下「浅間大社」と記述）です。

社伝によれば大同元年（806）に、坂上田村麻呂によって水の湧く「湧玉池」現在地（富士宮市宮町）に遷されました。その後、浅間大社は朝廷により格式のある神社とされて保護を受け、朝廷の衰退後は源頼朝をはじめ、北条氏、武田氏といった武家の保護を受けるようになりました。特に、徳川家康は関ヶ原での戦勝を祈願し、その加護により勝利を得たとして、慶長9（1604）年に現在の本殿（重要文化財）、拝殿、楼門などの社殿を造営しています。

なお、本殿は下層の建物に上層を重ねたもので、全国の浅間神社には他に例のない独特の建築様式で『浅間造』と言います。

境内には、富士山の湧水が一日平均20万も湧き出す『湧玉池』があります。古くから道者はここで水垢離をし、

今も続く山宮と浅間大社の関わり

神社が遷された後も、山宮と浅間大社との関わりは続きました。それを示すものが「山宮御神幸」と呼ばれる行事です。これは4月と11月の例大祭（現在は11月のみ実施）前日に行われる行事で、神の憑る御銚を浅間大社から山宮へ運び、神事を行った後、翌朝（午前2時）に浅間大社に還幸する行事です。神が往復するという部分に山宮と里宮である浅間大社との関わりが見て取れます。この行事は明治6（1873）年後途絶え、両社への参拝という形に簡素化されましたが、平成18（2006）年、遷宮1200年記念事業として山宮御神幸がおこなわれました。

富士山への信仰は時代とともに変化しつつ、現在も続いているのです。



富士山本宮浅間大社本殿（正面奥が上層部分）

古い信仰を残す山宮浅間神社

浅間神社の中でも最も古いものと考えられているのが、富士宮市山宮（JR富士宮駅の北北東約6km）の「山宮浅間神社」（以下「山宮」と記述）です。

から関東地方を中心に浅間神社が作られ、現在その数は約1300社あるといわれています。



山宮浅間神社の参道（正面奥の籠屋の先は祭場があるだけ）

なお浅間大神は、富士山が平穏を保つと水徳の神として農業の神様ともなり広く信仰を集めていました。その後、富士山での修験道が盛んになると大日如来が姿を変えてあらわれた仏（浅間大菩薩）であるとも言われました。また、いつからかははっきりしませんが（文献上は江戸時代はじめより）、富士山の神はコノハナサクヤヒメであると言われるようになり、現在多くの浅間神社はこの女神を祀っています。

「富士山世界遺産塾」を初めて開講!

8月11日〜12日、県内から集まった小中学生51名を対象に「富士山世界遺産塾」を開講しました。

これは、子どもたちに、普段見慣れた富士山が世界遺産としてどのような価値を持っているかを理解してもらい、世界遺産登録の応援団になってもらうため、構成資産候補を訪れ、実際に見て・触れて・体験してもらおうプログラムです。

◆信仰の山

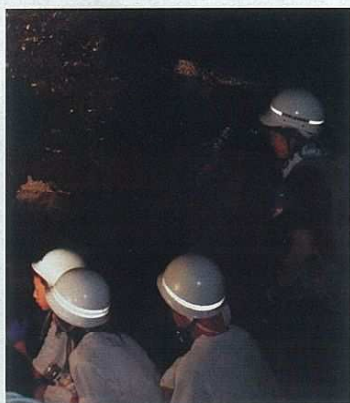
「富士山本宮浅間大社」、「人穴浅間神社」(富士宮市)を訪れました。

浅間大社では、神社の起源のほか、湧玉池(特別天然記念物)や富士曼荼羅図(重要文化財)の説明を受け、富士山は昔から大きな存在であることを改めて感じました。



【富士曼荼羅図の説明】

また、人穴洞くつの探検では、真夏でも寒かったことと、完全な暗闇を体験したことが子どもたちに強烈な思い出として残りました。



【洞くつ探検の様子】

◆宝永登山(御中道体験)

修行の道として使われていた「御中道」を体験すべく、宝永登山を行いました。

富士登山が初めての参加者も多く、山頂火口よりも大きい宝永火口の雄大さに感嘆の声が上がりました。



【御中道体験の様子】

また、5合目駐車場では登山者が残っていたごみの清掃活動を行い、「富士山は私たちが守る」という気持ちを一層強く持つことができました。

◆世界遺産塾に参加して

参加者からは、「富士山は見慣れているけれど、新たな富士山の魅力を知ることができた」「今回の体験を通して、富士山が世界遺産に登録できるよう協力したい」との感想が寄せられるなど好評でした。

富士山の価値を理解し、大切に思うのが広がり、富士山を世界文化遺産にして、これから先も守っていこうという気持ちを持て強くなりました。

タイのTV局が「富士山」を取材!

日本政府観光局(JNTO)からタイの日本紹介番組『SA Y | H i!』の取材受け入れ要請があり、9月上旬に、富士山を題材にした番組制作に協力しました。

この番組は、2006年の番組スタートから60回以上にわたり日本の魅力をタイの人々に紹介している番組で、番組パーソナリティは、国土交通省からタイ親善大使として任命されている女優のティックさんが務めています。

今回の取材では、富士山体、三保松原、柿田川、駒門風穴などの構成資産候補の紹介を盛り込むなど、富士山世界文化遺産登録を国外に向けてPRする良い機会となりました。



【御殿場口登山道にて】